

近代以前の子どもの生活において、「病氣」の持つ意味の大きさを、改めてみつめ直してみたい。

「七才までは神のうち」という諺が物語るように、三〇パーセント近い子どもたちが、七才の境を越えることなく、短い生命を終えるのが常であった。彼らに襲いかかり、いや応なしにその肉体をとりこにする病氣、とりわけ、「天然痘」や

「麻疹」のような激症の流行病の前に、近代以前の医学は、極めて無力である。

従って、人々は、病氣の訪れをおののきつつ待ち、その「疫病神」が、穏かに、かつ速かに立ち去ってくれるよう、心してもてなすしかなかった。人々が仕えたのは、「病む子ども」と「疫病神」の両者であったろう。苦しむ子どもに薬湯を与え、同時に「抱瘡棚」に御酒を供えて、家族たちの生活は、病氣を中心にめぐったのである。

近隣の人々の生活も、また、流行病を

中心にして再編成される。近くの子どもが罹病したという知らせが入ると、早速、見舞いに行き、病状を確かめ、慰め合う。いよいよ、自分の家に病氣が到着すると、人々の訪問や慰めを受け、応接に忙しい。さながら、「病む子ども」を中心とする一大社交場が出現したかの感があった。

その揚句、無事病魔が退散したあかつきには、近隣を挙げての祝宴が催される。病氣は、まさに、一大行事であった。従って、病氣をきっかけとして、子どもも、その周囲の人々も、すべて新しく関係を結び直す。大患は、まさに「死と再生」の通過儀礼であったのだ。

近代医学が追放したのは、肉体の病氣だけでなく、この「死と再生」の機会だったのではないか。子どもの生活が余りにも合理化され、かげりを失なった今日のあり方を、いま一度、みつめ直す必要がありそうである。

(H)

幼児の教育 第八十一巻 第七号

七月号 © 定価二七〇円

昭和五十七年六月二十五日 印刷
昭和五十七年七月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。